

# 『賦光源氏物語詩』を読む（七）

——胡蝶・螢・常夏・篝火・野分——

本 間 洋 一

## 二十四 胡蝶（玉鬢并之）

池上春遊仙境靜 池上の春遊 仙境靜かなり

妓船移棹出沙汀 妓船 棹を移し 沙汀を出づ

或吹或撫携絃管 或（ひと）は吹き或（ひと）は撫して

絃管を携へ

有鳥有花飽視聽 鳥有り花有りて 視聽に飽く

柯爛紅桜連紗苑 柯は爛る 紅桜の紗（こすゐ）に連なる苑

歌清青柳動塵庭 歌は清し 青柳の塵を動かす庭

款冬籬下見胡蝶 款冬の籬（まがき）の下に 胡蝶を見

黄色衣輕宛軋形 黄色の衣は軽く 宛軋たる形あり

（七律。汀・聽・庭・形（下平声青韻））

卷名は第七句に詠込まれている。この巻は、三月末、光源氏の六条院の春たけなわの風景の中で催された盛大な船遊びが夜を徹して行われる場面から始まる。その中で先ず一際玉鬢（西の対の姫君）が人々の注目を集める様子が語られ、次に翌日の秋好中宮の季の御読経の優美なシーンとなり、巻の称となった紫の上の「花園の胡蝶をさへや」の歌に、中宮の返歌と続いてゆく。後半は、玉鬢中心に物語は展開する。初夏となり、光源氏は玉鬢のもとに届けられる多くの恋文を見ては、その相手について論評したり、対応のアドバイスをし、返歌を促している。が、美しく成長した彼女に、光源氏自身が単なる愛しさを越えて、女としての彼女に慕情を募らせ、告白するに至り、彼女を困惑させるという展開になっている。詩句を聯毎に訳出すると

次のようになるだろうか。

(六条院の南) 池をめぐる春の舟遊びはさながら神仙世界の静けさを思わせませす。若い女房達を乗せた舟が漕ぎ出されて沙岸の水際を離れ(て中の島の入江に漕ぎ寄せ)たのでございました。

(夜になって庭先の下に楽人をお召しになり、上達部や親王達も)ある者は管楽器を、ある者は絃楽器を奏で、とりどりに楽器を携えていらつしやる。囀る鳥の声や咲き匂う花の中、人々は目と耳で十分に楽しまれたのでございました。

(仙界の童児の琴歌に心奪われて時を過ごし)斧の柄を腐らせてしまった(王質の)ように、(人々は)紅桜の梢を連ねるこの六条院の苑で時を忘れて楽しみ、(兵部卿宮様)の)歌声は清らかに響き、(催馬楽の「青柳」ならぬ)青々とした柳の塵をゆるがすほどにすばらしい六条院の庭でございます。

(中宮の季の御読経の条ですが)やまぶきの垣根のもとに蝶(の装束の女童たち)を見(やまぶき色の)黄色の衣(山吹襲)の軽やかに舞う姿が見られたことでございます。

首聯の背景は「唐めいたる舟造らせたまひける、急ぎさうぞかせたまひておろし始めさせたまふ日は、雅楽寮の人召して船の楽せらるる」(③165頁6〜8行)や、「龍頭鷲首を、唐の装ひにことごとしうしつらひて、棹かぢのりの棹さす童べ、みな角髪結ひて、唐土ちゆうどだたせて、さる大きなる池の中にさし出でたれば、まことの知らぬ国くにに來たらむ心地して、あはれにおもしろく、見ならはぬ女房などは思ふ。中島なかのまの入江の岩蔭にさし寄せて見れば」(③166頁8〜12行)などとあるあたりとみて良いだろうか。六条院の紫の上の居処の庭は「春の御前のありさま、常よりことに尽くしてほふ花の色、鳥の声、他の里には、まだ、古りぬに、やとめづらしう見え聞こゆ」(③165頁1〜4行)とも描かれていたが、その地の過ぎ難き春や見知らぬ国かと記されているのを、詩は「仙境」と表現する。華やかさも喚起される場面だが、舟に乗る童の角髪姿には、当然白居易「海漫々」に見える、徐福の下に不死の薬を求め蓬萊を目指した「童男叩女」が喚起されるわけであり、漕ぎ寄せた中の島は蓬萊に見立てられていることなるう。すなわち徐福ら一行は蓬萊——六条院——にたどり着いた、というわけである。「仙境」は「新開二潭洞二疑二仙境二、遠写二丹青一到二雍州二」(劉禹錫「答二

東陽子令寒碧園詩」や「梵宮日暮、仙境春閑」（紀齊名「暮春勸学会（中略）賦撰」念山林一詩序）『本朝文粹』卷一〇・278）などと用いられるように俗外の地、出世間的な世界を指す、いわば常套表現である。「妓船」は妓女を乗せた舟。「木蘭之柁沙棠舟、玉簫金管坐二両頭一、美酒樽中置二千斛一、載レ妓随レ波任二去留一」（李白「江上吟」）はその様子を詠み、「緑藤陰下鋪二歌席一、紅藕花中泊二妓船一」（白居易「西湖留別」）『白氏文集』卷五三）と見えて、「傍レ山賓閣苔猶緑、帰レ浦妓船藕自馨」（藤原周光「夏日泉亭即事」『本朝無題詩』卷六・375）と用いられている。「移棹」は舟を移動させること。「黄牛渡北移二征棹一、白狗崖東卷二別筵一」（白居易「十年三月三十日別二微之於澧上二（下略）」『白氏文集』卷一七）、「移レ棹者唯閑雁、遙感二旅宿之随一レ時」（菅原道真「賦三閑居染二秋水一詩序」『和漢朗詠集』卷下・水付漁父516『本朝文粹』卷八・230）などとなる。「沙汀」は水際の沙浜。「碣岸束二鳴咽一、沙汀散二淪漣二」（白居易「題二牛相公婦仁里宅新成小灘二」『白氏文集』卷六九）「緑松島、白沙汀、紅鯉白鷺、小橋小船、平生所レ好、尽在二於中一」（慶滋保胤「池亭記」『本朝文粹』卷一二・375）はその語例。

『賦光源氏物語詩』を読む（七）

頷聯は、「暮れかかるほどに、皇聲わうじやうといふ楽しいとおもしろく聞こゆるに、心にもあらず、釣殿にさし寄せられておりぬ。……世に目馴れずめづらかなる楽ども仕うまつる。……御階みせの……もの苔の上に、楽人召して、上達部、親王みこたちも、みなおのおの弾物、吹物とりどりにしたまふ。物の師ども、ことにすぐれたるかぎり、双調吹さうぢゆうきて……御琴どもの調べ、いとほやかに掻きたてて……賤の男も……笑み、さかえ聞きけり。……夜もすがら遊び明かしたまふ」（③168頁4行～169頁5行）という状況で夜通し管絃の遊びが行われたことを背景としている。猶、第四句「有鳥有花」には前掲首聯の物語本文の一節に「にほふ花の色、鳥の声、他の里にはいまだ古りぬにや」とあったことも喚起されよう。「或一或一」や「有一有一」の表現パターンは類例に「或歌或舞或悲啼、翠眉不レ拳花顏低」（白居易「古塚狐」）『白氏文集』卷四）、「有レ花有レ酒有二笙歌一、其三奈難レ逢二親故一何」（同「寄二明州于駙馬使君二三絶句」其一、同上卷六五）「或灑或飛南北雨、乍飄乍扇東西風」（空海「秋山望レ雲以憶二此心二」『経国集』卷一三）「有レ花有レ鳥足二相叨一、此処自然令二意勞一」（藤原茂明「春日即事」『本朝無題詩』卷四・202）などがある。「絃管」は管絃に同じく、絃と管の楽器

を言う。「絃管随レ宜有、盃觴不レ道レ無」(白居易「東城春意」  
『白氏文集』卷一八)「玉磬声思二絃管奏一、衲衣僧代二綺羅  
人二」(小野篁「法華会詩」『和漢朗詠集』卷下・仏事595)など  
一般的な語彙。「撫」は「北方有二佳人一、端坐鼓二鳴琴一、終  
晨撫二管絃一、日夕不レ成レ音」(張華「情詩五首」其一)『玉台  
新詠』卷二)「見説秋堂事、金吾撫二玉琴一」(奉レ和二執金吾  
相公彈琴之作二)『菅家文章』卷一)など見えるように、手  
を当て奏する意。「視聽」は見つめることと聞き入ること、転  
じて目と耳の意にもなる。「不レ窮二視聽界一、焉識二宇宙広一」  
(白居易「登二香鑪峯頂一」)『白氏文集』卷七)「一留一去春天旅、  
霧色潮声入二視聽一」(釈蓮禪「乗レ船到二新宮湊一」)『本朝無題  
詩』卷七・488)など見える。「飽」は今日云うマイナス・イ  
メージの飽きではなく、十分に満ち足りているという意。「丈  
室可レ容レ身、斗儲可レ充レ腹……終朝飽二飯飡一、卒レ歳豊二衣  
服二」(白居易「秋居書懷」)『白氏文集』卷五)は、食に満ち足  
り衣服も豊かであると詠む一例。

頸聯の第五句は恐らく舟遊びの首聯冒頭引用文に続く部分で、  
庭園の美しさを表現する次の場面を意識して表現したものであ  
ろう。

こなたかなた霞みあひたる梢ども、錦に引きわたせるに、  
御前の方ははるばると見やられて、色を増したる柳枝を垂  
れたる、花もえもいはぬ匂ひを散らしたり。他所には盛り  
過ぎたる桜も、今盛りにほほ笑み、廊を繞れる藤の色もこ  
まやかに……まして池の水に影うつしたる山吹、岸よりこ  
ぼれていみじき盛りなり。水鳥どもの、つがひを離れず遊  
びつつ、細き枝どもをくひて飛びちがふ……物の絵<sup>え</sup>様にも  
描き取らまほしきに、まことに斧の柄も朽いっべう思ひつ  
つ、日を暮らす。

(③166頁13行〜167頁7行)

第六句は舟遊びの夜に篝火が庭先で焚かれる場面、即ち頸聯の  
前掲引用文の末尾に続く「返り声に喜春樂立ちそひて、兵部卿  
宮青柳折り返しおもしろくうたひたまふ。主の大臣も言加へた  
まふ」(③169頁5〜7行)あたりを念頭において詠じていよう。  
〔柯爛<sup>注</sup>〕は斧の柄が朽ちる意で、「晋書曰、王質入レ山斫レ木。  
見二童困碁。坐觀レ之、及レ起斧柯已爛矣」(『太平御覽』卷七  
五二・困碁)とあるのはよく知られ、道真も「若得レ逢二仙  
客一、樵夫定爛レ柯」(「困碁」)『菅家文章』卷五)と詠んでいて、  
『和漢朗詠集永洛注』(卷下・仙家545、大江朝綱「落花乱二舞  
衣一詩序」の句の注)も困碁と関わる故事の系譜に在るが、小

学館本『源氏物語』③の補注に引く「信安郡石室山、晋時王質伐レ木至、見ニ童子数人碁而歌、質因聽レ之。童子以ニ一物一与レ質。如ニ棗核一。含レ之不レ覺レ饑。俄頃童子謂曰、何不レ去。質起視、斧柯爛尽。既帰無ニ復時人一」(漢魏叢書本『述異記』卷上)では、童子は「碁而歌」っていたと記す。ところが、『河海抄』(卷一〇・胡蝶)に挙げる『郡国志』では「童子数四彈琴而歌」と、「碁(碁)」には触れず、『東陽記』(『太平御覽』卷七六三・斧。『水経注』卷四〇所引とは本文に若干異同がある)も「童子数人彈琴而歌」うのに聴き入っていたと記す。これに依れば道真詩や永済注とは違う受容の仕方があったと考え、よく、本巻の典故としては『郡国志』や『東陽記』の方がよりふさわしいように思われる。つまり、『河海抄』撰者は敢て「碁」に関係ない故事本文を選んで注記したのではないか——何故なら物語本文には音楽は見えるが碁は出てこない——と稿者は臆測したのである。そして、本詩の作者もその注に則り詠んでいるように思われてならないのである。さて、「紅桜」は紅色の桜の花。「引レ手攀ニ紅桜一、紅桜落似レ霞(白居易『花下対レ酒二首』其二『白氏文集』卷一一)他白詩によく見えるが、中国の桜はサクラランボの花とも(ユスラウメを指すの

『賦光源氏物語詩』を読む(七)

だという人もいる)。桜の漢詩は平城上皇「賦ニ桜花二」(『凌雲集』)が早いが、「適逢ニ知意一、翫ニ春光一、緑柳紅桜繞ニ小廊二」(『野庄』『晋家文章』卷四)は本朝語例の早い例。「連抄」は「連レ枝花様繡羅襦、本擬新年餉ニ小姑二」(『繡婦歎』)『白氏文集』卷五五)に同じ。平仄の関係から「枝」(平声)を「抄」(仄声)に代えて用いたものであろう。「歌清叩ニ寒玉一、古詩惜ニ昼短二」(『遊ニ平泉一宴ニ温間……』)『白氏文集』卷六九)は「歌清」(歌声が澄んでいる)の一例。「劉向別録曰、有ニ麗人ニ歌レ賦。漢興以來、善ニ雅歌ニ者、魯人虞公、發レ声清哀、蓋動ニ梁塵二」(『芸文類聚』卷四三・歌)は「動塵」(すばらしい音楽のさま)の故事で、「文選」や『白氏文集』でも用いられ、「動レ塵響恨ニ韶光尽一、貫玉声愁ニ夜漏繁二」(村上帝「長歌惜ニ春意二」『類聚句題抄』284)は本朝の一例である。

尾聯は舟遊びの次の中宮の季の御読経の場面、「春の上紫の上)の御心ざしに、仏に花奉らせたまふ。鳥、蝶にさうざき分けたる童べ、八人、容貌などことにととのへさせたまひて、鳥には、銀しなねの花瓶に桜をさし、蝶は、黄金の瓶に山吹を、同じき花の房いかめしう、世になきにはひを尽くさせたまへり」(③171頁13行〜172頁2行)とあって、女童達が供花を奉り、紫

の上の「花ぞののこて、ふをさへや下草に秋まつむしはうとく見  
るらむ」(③172頁10〜11行)が詠まれ、鳥の奏楽の後、「蝶はま  
して、はかなきさまに飛びたちて、山吹の籬のもとに、咲きこ  
はれたる花の蔭に舞ひいづる」(③173頁1〜3行)と、蝶の装  
束の女童達の軽やかな舞いを描写するあたり迄を詩句に詠込ん  
でいる。鳥と蝶の装束の女童たちには各々桜襲の細長や山吹襲  
の細長が御褒美として下賜され、中宮の「こて、ふにもさそわれ  
なまし……」の返歌へと物語は続くのだが漢詩はその前で終わ  
る。従つてこの巻の後半に展開する光源氏の玉鬘への思いに関  
わる部分は詠詩の対象とはならず、巻名の由来となる和歌迄を  
詠ずるとどまる。「款冬」は『和漢朗詠集』の部立てでも馴  
染みの春のやまぶきの花のこと。「点二着雌黄一天有レ意、款冬、  
誤綻暮春風」(作者未詳「清慎公小野宮宴」『和漢朗詠集』卷  
上・款冬140)は最もよく知られる例であろう。猶、林羅山は款  
冬を山吹に当てたのは誤りで、本来は醲とびのことだといふ  
〔林羅山詩集』卷五三「庭上款冬」詩。また「再次二山吹花詩  
韻二」詩でも「山吹此云二耶摩布岐一、其花色黄似三醲醲酒二」  
などと注している)。「不レ見二籬下菊一、但餘二墟中煙二」(白  
居易「訪二陶公旧宅二」『白氏文集』卷七)「屢抽二籬下二行猶久、

遍覺二沙痕一跡漸深」(具平親王「採レ筍出林遲」)類聚句題  
抄』384)は「籬下」(かきねのもと)の例。「胡蝶」と言えは  
「昔者、莊周、夢為二胡蝶一、栩栩然胡蝶也。自喻適レ志与、  
不レ知レ周也。俄然覺則遽々然周也。不レ知、周之夢為二胡蝶一  
与、胡蝶之夢為レ周与」(「莊子」齊物論を想い起すが、こ  
こは物化に関わる例ではなく、「數群胡蝶飛乱レ空、雜色紛々  
花樹中」(嵯峨帝「和二巨識人春日四詠」(舞蝶)、『文華秀麗  
集』卷下)と同様、単に蝶のことを言う。また、「宛転」は緩  
やかに美しく舞う様子で、「管急絃繁拍漸稠、緑腰宛転曲終頭」  
(白居易「樂世」『白氏文集』卷六八)とあるものなどが参考に  
なろう。

## 二十五 蛩(同三)

西対ト棲常恋母	西の対に <small>し</small> めて棲み	常に母を恋ふ
大夫監事向誰陳	大夫監 <small>の</small> 事 誰に向かひて陳べん	
齊紈影隔厭蛩妓	齊紈の影の隔て	蛩を厭ふ妓
衛府手番閑馬人	衛府の手の番 <small>ひ</small>	馬に閑 <small>ま</small> ふ人
真理狂言非異類	真理と狂言とは	類を異にするに非ず
菩提煩惱是同因	菩提と煩惱とは	是れ因を同じうせん

高麗物語画図匣 高麗こまのの物語 画図えずの匣はこ

見昼寝姿情感類 昼寝の姿を見て 情感類かんげんるいなり

(七律。陳・人・因・類(上平声真韻))

卷名は第三句に詠込まれている。この巻は、光源氏の懸想に戸惑い苦悩する玉鬘に、螢兵部卿官が熱心な求愛をし、光源氏は螢を使つて玉鬘の姿を彼に見させ、思いを募らせ和歌の贈答をさせたりするのだが、その一方で自らの彼女への思いに悩んでもいる。花散里の夏の御殿の馬場で近衛の競射が行われた折、光源氏は彼女の労をいたわり、共に兵部卿官の話などして夜を過ごした。さて、長雨の続く中、絵物語などの読書や書写に日々を送っている玉鬘との対話の場面で、光源氏は物語とは虚構を交えつつ人間の真実を描く有益なもののだと説き、二人の関係を「いざ、たぐひなき物語にして、世に伝へさせん」(③213頁10〜11行)とぬけぬけと口説いたりもしているが、紫の上との対話から玉鬘の物語選びにはこまやかな気配りをしていることが知られる。聯毎に訳出してみることにしよう。

西の対たぐの屋にお住まいの玉鬘様は、つねに亡くなられた母君(夕顔)のことを恋慕こぼっておられます。(あの筑紫で暮らしておりました頃の)肥後の大夫監の(強引な求婚に

憂鬱な思いでおりました) ことなどどなたに向つて訴え(氣を晴らし) たものでしょうか(母君もおりませんのでそれでもできないのでございます)。

(光源氏様が玉鬘の近くに寄られ、薄衣に包んでいた螢をお放ちになりますと) 斉の純素で作りました扇で顔をお隠しになる玉鬘様でございました。また、(花散里様方で行われます) 左近衛府の競射には、弓馬に嗜みある方々が取組まれたことでございます。

(光源氏様の仰るように、物語におきましては) 真理まことと狂言くるげんは別のもものではございません(虚構の中にも人間の真理はあるのでございます)。(それはまた) 菩提ぼだいと煩惱ぼんごうとは因縁を同じくするというようなことでございます。

あの『高麗物語』の絵の中に(幼い女君が無心に昼寝をしている様子が描かれておりますが、紫の上は) その昼寝の姿を見ては、(御自身の子供の頃のことを) 頻りに思い出されているのでございました。

首聯は次の場面を意識して詠まれたものであろう。対たぐの姫君こそ、いとほしく、思ひのほかなる思ひ添そひて、いかにせむと思し乱みだるめれ。かの監まねが、うかりし、まにはな

ずらふべきけはひならねど、かかる筋に、かけても人の思ひよりきこゆべきことならねば、心ひとつに思しつつ、さ異に疎ましと思ひきこえたまふ。何ごとをも思し知りたる御齡なれば、とざまかうさまに思し集めつつ、母君のおはせずなりにける口惜しさも、またとり返し惜しく悲しくおぼゆ。(③195頁6～12行)

「卜棲」とは住むに当たりその処を占い選び定める習慣があったことに依り、ここでは住居する意。「卜居」とも。「語儷」絃管韻一、棲卜、綺羅花一(早春侍二内宴一賦レ聽二早鶯一)『菅家文章』巻二)というに同じ。「向誰」は誰に(対して)の意。「再遊」巫峡一知何日、捻是秦人説レ向レ誰一(寄二題忠州小樓桃花一)『白氏文集』巻一九)「松柏颯々猿響切、青鸞妙法向レ誰、陳」(故贈僧正勤操大徳影讚)『性靈集』巻一〇)などはその例。

頷聯の第三句の背景は、光源氏が、螢の明かりで玉鬘の姿を兵部卿宮に見せようとする次の条である。

……寄りたまひて、御几帳の帷子を一重うちかけたまふにあはせて、さと光るもの、紙燭をさし出でたるかとあきれたり。螢を薄きかたに、この夕つ方いと多くつつみおきて、

光をつつみ隠したまへりけるを、さりげなく、とかくひきつくろふやうにて。にはかにかく掲焉に光れるに、あさましくて、扇をさし隠したまへるかたはら目いとをかしげなり。おどろかしき光見えば、宮ものぞきたまひなむ……。(③200頁2～9行)

さらに第四句は次の花散里方の馬場での競射の場面を念頭に置いたものである。

「中将の今日の衛府の手結のついでに……馬場殿は、こなたの廊より見通す、ほど遠からず。」「若き人々、渡殿の戸開けて物見やや。左の衛府にいとよしある官人多かるころなり。少々の殿上人に劣るまじ」……未の刻に馬場殿に出でたまひて、げに親王たちおはし集ひたり。手結の、公事にはさま変はりて……さまことにいまめかしく遊び暮らしたまふ。(③205頁13～15行)

「斉純」はここでは(白い絹で作った)扇のこと。「漢班婕妤扇詩曰、新裂斉純素、鮮絜如二霜雪一、裁成二合歡扇一……」(芸文類聚)巻六九・扇。他に『初学記』巻一・月、巻二・雪、霜や『文選』巻二七『玉台新詠』巻一等にも所収されて有名)とあるに依り、「楚竹煙寒宜レ巻レ簾、斉純雪冷欲レ収レ霜」(源隆



俊「扇裏有<sub>二</sub>秋風<sub>一</sub>」天喜四年詩合」と詠まれる。「妓」はここでは玉鬘を指している。「螢」は和歌では「螢火」「思ひ」「燃ゆ」の掛詞・縁語をもって恋情表現として詠まれることも少なくないが、ここでは、光源氏の玉鬘への「おも火」を彼女が「厭」がっているのを掛けいるというのは稿者の僻目か。「手番」は競射の儀のことで和習用語。物語本文には「手結」（つうがひ）とあるが、「亦騎射手番之時、非<sub>二</sub>射手<sub>一</sub>官人亦無<sub>二</sub>被物<sub>一</sub>」（三代実録）元慶八年四月一日条とも見える。「閑馬人」は馬の扱いに慣れた人、ここでは弓馬に熟達している者を言うだろう。「遊于北園」、四馬既閑」（『毛詩』秦風「駟驂」。毛伝に「閑、習也」とあり、馴らし訓練する意に用いている。

頸聯は、光源氏が所謂物語論を展開する条（③210～216頁）が背景となっている。

さてこのいつはりどもの中に、げにさもあらむとあはれを見せ、つきづきしくつづけたる、はた、はかなしごとと知りながら、いたづらに心動き、らうたげなる姫君のもの思へる見るにかた心つくかし。またいとあるまじきことかなと見る見る、おどろおどろしくとりなしけるが、目おどろきて、静かにまた聞くたびぞ、憎けれどふとをかしきふ

『賦光源氏物語詩』を読む（七）

しあらはなるなどもあるべし。……そらごとをよくし馴れたる口つきよりぞ言ひ出だすらむとおぼゆれどさしもあらじや」とのたまへば、「げに、いつはり、馴れたる人や、さまざまにさも酌みはべらむ。ただいとまごのことこそ思うたまへられけれ」……（③211頁5行～212頁1行）

の文中に見える「いつはり」「そらごと」は第五句の「狂言」に、「まご」とは「真理」に当たる。そして、これに続く、

ひたぶるにそらごとと言ひはてむも、事の心違ひてなむありける。仏のいとうるはしき心にて説きおきたまへる御法も、方便といふことありて、悟りなき者は、ここかしこ違ふ疑ひをおきつべくなん、方等經（ほうとうきやう）の中に多かれど、言ひもてゆけば、一つ旨にありて、菩提と煩惱との隔たりなむこの、人のよきあしきばかりのことは変りける。よく言へば、すべて何ごとも空しからずなりぬや」と物語をいとわざとのことにのたまひなすつ。（③212頁15行～213頁7行）

の件が第六句の背景となる部分である。「真理」は真の道理。言葉を超えた悟りの状態、そこに至ることを言う。「復不能<sub>レ</sub>体<sub>二</sub>真理<sub>一</sub>極<sub>一</sub>」（『無量義經』十功德品）「自<sub>レ</sub>到<sub>二</sub>溷陽<sub>一</sub>生<sub>二</sub>三女子<sub>一</sub>、因詮<sub>二</sub>真理<sub>一</sub>用遣<sub>二</sub>妄懷<sub>一</sub>」（『白氏文集』卷一七所収詩

題)「山静俗塵寂、谷閑真理専」(麻田陽春「和下藤江守詠」神叡山先考之旧禅処柳樹一之作上)『懷風藻』などである。「狂言」は道理に合わぬことばの意で、「今生世俗文字之業、狂言綺語之誤」(香山寺白氏洛中集記)『白氏文集』卷七〇『和漢朗詠集』卷下・仏事588)はよく知られた例で、『三宝絵詞』(卷下)『栄花物語』(疑卷)『今鏡』(打聞)『源氏物語』の論評条など様々な書に引用されている。「異類」はここでは異なることと、同様ではない意。「有欲無欲、異レ類也」(荀子「正名」とあるが、漢文では人種を異にするとか、人間ではない存在の意に用いることもある。「菩提」は悟り(の境地に入ること)。「功德具足、心念口演、微妙広大、慈悲仁讓、志意和雅、能至三菩提」(『法華経』提婆達多品)は、サーガラ竜王の娘について語った一節。また、「煩惱」も人の心を悩ますもの、妄念の意で、「一心修行、断二除煩悩」(『無量義経』十功德品)等、以上の二語は仏書に頻出する語彙であることは言を要しない。

尾聯は、前記の物語論のあと、紫の上が光源氏と物語について会話する次の場面を背景としていよう。

紫の上も、姫君の御あつらへにことつけて、物語は捨てが

たく思したり。くまの、物の、語の、絵にてあるを、「いとよく描きたる絵かな」とて御覧す。小さき女君の、何心もなく、て昼寝したまへる所を、昔のありさま思し出でて、女君は見たまふ。

(③24頁11~15行)

猶、詩句に「高麗物語」とするのは「こま野の物語」(散佚物語)『枕草子』「物語は」成信の中將は「に見える」を指すと解したことになる。「画図」は絵。「愁苦辛勤憔悴尽、如今却似三画图中」(王昭君二首)其一『白氏文集』卷一四『和漢朗詠集』卷下・王昭君697)「秋山自似画図成、軒騎登臨幾喜晴」(秋日遊三般若寺一同賦)「秋山似三画図」『江吏部集』卷上)などであるが、「昼寝姿」は和習措辞で、本来の漢詩表現にはありえないであろう。「情感」は心に湧く思い。「人生有二情感、遇レ物牽レ所レ思」(庭槐)『白氏文集』卷一一)「閑居情感、被三何催」(門巷蕭条稀三客来)『藤原有国「初冬感」李部橋侍郎見レ過懷レ旧命レ飲』『本朝麗藻』卷下)はその用例である。

二十六 常夏〈同四〉

瞿麦浅深籬下開 瞿麦は浅く深く 籬下に開く

佳賓養眼倚風台 佳賓眼を養ひて 風台に倚る

前池避暑羞魚鮓 前池に暑を避けて 魚鮓を羞め

東閣献水勸酒盃 東閣に水を献じて 酒盃を勸む

常陸海篇非妙与 常陸の海の篇 妙なるに非ざらん

大河水字甚荒哉 大河の水の字 甚だ荒むかな

此歌返報又狂句 此の歌に返し報ぐるに 又狂句あり

中納言君欺不材 中納言の君 不材を欺れり

〔七律。開・台・盃・哉・材（上平声灰韻）〕

卷の名称は「瞿麦」(トコナツ。ナデシコとも訓む)として第一句に詠込まれている。この巻は猛暑の日、光源氏や夕霧が酒や氷水、水飯を食べつつ釣殿で涼をとり、内大臣が外腹の近江の君を引取った話題から、やがて光源氏が玉鬘と共に、夕霧・雲居雁の仲を語る場面へと続く。光源氏は和琴を奏して、その名手の父の内大臣の教えを受けることを彼女に勧めながらも、自分の彼女への慕る思いに惑い、彼女が夫を持っても熱心に口説こうなどと不埒な思いを抱いたりしている。その後は主

体が内大臣の方に移り、近江の君や玉鬘・明石の君が話題にされ、彼が光源氏批判をしているが、それは前段の光源氏の内大臣批判とバランスをとった感がある。さて、内大臣は愛しい娘の雲居雁を訪れる一方、近江の君の扱いに困り、教育を弘徽殿女御に依頼する。彼女は早口で話したり、「大御大壺とり（便器処理係）でお勤めしましょうか」「水を汲んで頭に載せてお仕えしましょう」などと言っては内大臣を苦笑させるが、本人は結構弘徽殿女御に仕えるのを楽しみにしている。田舎育ちの彼女は貴族の娘としての品も教養も不足で、歌も下手。女御への挨拶の手紙でも下手な歌や滑稽な書きぶりを發揮して失笑されてはいるものの、その返歌に本人は至って得意の面持ちである。この物語中でこれ迄にないキャラクターを付与されていると言つて良い。聯毎に訳すと以下のようになるうか。

（玉鬘の居る西の対では）なでしこが淡く或は濃く垣根に花開き、よきお客様方は目を楽しませて、風通しの良い建物に身をお寄せになつていらつしやる。

（光源氏様方は）南池に暑さをお避けになり、（その場で調理して）鮓を召しあがり、この大臣様（光源氏）の邸宅では、氷水を飲まれたり、酒杯が勧められたことございま

した。

(近江の君が弘徽殿女御様にあてて)「草わかみひたちの浦のいかさがさき」(お会いしたい)と詠んだ歌はとても上手だなどと申せませんし、「大川の水の字」並の一通りの文字どころか(草仮名を用いたいかつい)ひどい筆跡なのでございました。

その下手な歌に返歌いたしますに、たわぶれの歌を仕立てまして(女御様の代筆をつとめた)中納言の君様も(近江の君の下手な歌いぶりに倣って)下手に装い返歌なさったことでございます。

首聯は「御前に、乱れがはしき前栽なども植ゑさせたまはず、撫子の色をととのへたる、唐の、大和の、籬ませいとなつかしく、結ひなして、咲き乱れたる夕映えいみじく見ゆ。みな立ち寄りて、心のままにも折り、取らぬを飽かず思ひつつやすらふ」(③228頁3〜6行)とある部分を背景とする。「瞿麦」はトコナツ(ナデシコとも)。これを歌に詠むのは勿論多いが、島田忠臣(禁中瞿麦花詩三十韻并序)「重奉レ題ニ禁中瞿麦花一応詔」『田氏家集』(巻下)や菅原道真(詠ニ瞿麦花一呈ニ諸賢)『菅家文草』(巻一)、藤原通憲(賦ニ瞿麦一)『本朝無題詩』(巻二・53)

等の漢詩もある。「浅深」は淡い色と濃い色の意で、色とりどりに変化ある様を表現している。「似レ火浅深、紅圧架、如レ錫気味緑粘レ台」(薔薇正開春酒初熟……)『白氏文集』(巻一七)「煙霞遠近応レ同レ戸、桃李浅深、似レ勸レ益」(賦ニ花時天似一醉)『菅家文草』(巻五)「和漢朗詠集」(巻上・三月三日40)は各々バラヤスモモの花の色の濃淡を表現した例。「籬下」は胡蝶卷の第七句参照。「佳賓」は立派な客人、良き客。嘉賓・佳客に同じ。「三五之天雲尽去、佳賓言レ志望蒼々」(藤原忠通「八月十五夜翫レ月」『本朝無題詩』(巻三・138)は一例。「養眼」は「樹ニ五色一施ニ五采一列ニ文章一、養レ目之道也」(『呂覽』(孝行)同様に見て楽しむこと。目の保養になる、と今日言うに近く、悦目に同じ。「風台」は他に余り例を見ないが、ここでは風通しの良い建物のことだろう。文脈からすると六条院の西の対あたりを言うのでなければならぬ。但し、本巻冒頭に東の「釣殿」(③223頁1行)での納涼の場面があり、「風いとよく吹」く(同上9行)ともあるので、それを意識して用いているかも知れない。

領聯は次の冒頭場面を背景にしていよう。

いと暑き日、東の釣殿に出でたまひて涼みたまふ。中將の

君もさぶらひたまふ。親しき殿上人あまたさぶらひて、西川より奉れる鮎、近き川のいしぶしやうのもの、御前にて調じてまゐらす。例の、大殿の君達、中将の御あたり尋ねて参りたまへり。「さうさうしくねぶたかりつる。をりよくものしたまへるかな」とて、大御酒まゐり、氷水召して、水飯などとりどりにさうどきつつ食ふ。(③223頁1〜8行)

「前池」は六条院の南池を指し、その釣殿に光源氏達は居る。「前池、秋始半、弁物多摧壞」(「秋池二首」其一「白氏文集」卷一)「唯楽三前池、無二苦熱一、月明白浪暈二氷霜一」(藤原道長「左右好風来」『本朝麗藻』卷上)は用例。「避暑」は暑気避け涼むこと。「何処堪レ避暑、林間背レ日楼、何処好レ追レ涼池上随レ風舟」(「何処堪レ避暑」『白氏文集』卷六三)など白詩にもよく見える語で、道真にも「避暑閑亭上、消レ憂客恨中」(「納涼小宴」『菅家文章』卷四)とあり、河朔の飲なる故事も避暑の飲酒に関わるものであったことが想起される。「魚鮓」は魚のなれずしを言うのが一般だろうが、ここは魚料理という程の意で良いか。「東閣」は太政大臣光源氏の六条院邸(の東の殿)を指す。「公孫弘為二丞相一、開二東閣一以招二賢人一。後封二平津侯一。丞相封レ侯、自レ弘而始也」(「蒙求」漢

相東閣)とあるに因んでよく用いられる表現(「閣」と「閣は通用する)。「献氷」は氷室の氷雪を献上する意。「頒氷(夏頒レ氷。注、夏暑氣盛、乃須レ賜レ氷也)」「白氏六帖」卷一・氷)と見えるのは「周札」鄭玄注(「初学記」卷七・氷「夏頒秋刷」参照)を用いたものか。「勸酒盃」は飲酒を促すこと。頸聯の背景は、近江の君が弘徽殿女御に滑稽な手紙や歌を贈る次の場面とみて良からう。

「さて女御殿に参れとのたまひつるをしぶしぶなるさまならば、ものしくもこそ思せ……まづ御文奉りたまふ。……裏には、「まことや、暮にも参りこむと思うたまへ立つは、厭ふにはゆるにや。いでや、いでや、あやしきみなせ川にを」とて、また端にかくぞ、

「草わかみひたちの浦のいかが崎いかであひ見んたごの浦浪

大川水の」と、青き色紙一重ねに、いと草がちに、怒れる手の、その筋とも見えず漂ひたる書きさまも、下長に、わりなくゆゑばめり。行のほど、端さまに筋かひて、倒れぬべく見ゆるを……。

(③248頁4行〜249頁7行)  
「常陸海篇」は「草わかみひたちの浦の……」の和歌を指す

〔篇〕は作品のこと。「大河水字」は近江の君が並々ならぬ思  
いを込めた文や歌であったが、その出来や筆跡がお粗末であつ  
たことを言っている。詩句はかなり和習的な表現になっている  
ようだ。

尾聯は前聯を受け、草仮名は読めない、支離滅裂の感ある  
近江の君の歌に困惑する女御に代わり、中納言の女房が代筆返  
歌することになった次の場面を背景にしているだろう。

「返り事、かくゆゑゆゑしく書かずは、わろしとや思ひお  
とされん。やがて書きたまへ」と譲りたまふ。持て出でて  
こそあらね、若き人は、ものをかしくて、みなうち笑ひぬ。  
御返り請へば、「をかしきこと筋にのみまつはれては、べ  
めれば、聞こえさせにくくこそ。宣旨書きまきては、いと  
ほしからむ」とて、ただ、御文めきて書く。「近きしるし  
なきおほつかなさはうらめしく、

ひたちなるするがの海のすまの浦に波立ち出でよ箱崎  
の松」

と書きて、読みきこゆれば、「あなうたて、まことにみつ  
からのにもこそ言ひなせ」と、かたはらいたげに思したれ  
ど、「それは聞かむ人わきまへはべりなむ」とて、おしつ

つみて出だしたつ。

(③250頁6行〜251頁4行)

中納言の返歌は、近江の君の支離滅裂な歌に倣い作られた「狂  
句」であり、彼女は自らの才を偽り下手を装った。猶、筆跡も  
女御の手を真似て書いている。「狂句」は「予春秋五十有七、  
目昏頭白、衰也久矣。拙音狂句、亦已多矣」(「後序」『白氏文  
集』卷五一)とあり、白詩中では狂言・狂吟・狂歌・狂詠・狂  
詞という語の仲間と言つて良いだろう。本朝でも「一篇狂句、一  
壺酒、箇裏時々足<sub>二</sub>醉吟<sub>一</sub>」(藤原通憲「書<sub>レ</sub>懷題<sub>二</sub>紙障<sub>一</sub>」)『本  
朝無題詩』卷二・121)などと用いられてもいる。「不材」は  
『莊子』(山木篇)に依る語で、「虫全<sub>二</sub>性命<sub>一</sub>縁<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>毒、木  
尽<sub>二</sub>天年<sub>一</sub>為<sub>二</sub>不材<sub>一</sub>」(「閑臥有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>思<sub>二</sub>一首<sub>一</sub>」其二『白氏文集』  
卷六五)「林翠宜<sub>レ</sub>看<sub>レ</sub>軒月陰、還差<sub>二</sub>不材<sub>一</sub>近<sub>二</sub>天臨<sub>一</sub>」(「仲雄王  
「奉<sub>レ</sub>和<sub>二</sub>下代<sub>一</sub>神泉古松<sub>一</sub>傷<sub>レ</sub>衰歌上」『文華秀麗集』卷下)と詠  
まれている。ここでは不才に同じである。

### 二十七 篝火(同五)

内大臣娘斯阿輩 内大臣の娘の 斯の阿輩  
賢愚性異不相兼 賢愚の性異にして 相兼ねず  
秋悲初到金風韻 秋の悲しみ 初めて到る 金風の韻

煙鬱難消篝火炎 煙鬱 消し難し 篝火の炎

被伴水声心更冷 水声に伴はれて 心更に冷じきも

従看雲鬢思弥添 雲鬢を看しより 思ひ 弥添ふ

吹笙吹笛閑遊客 笙を吹き笛を吹き 閑遊する客

此夜醉啼君勿厭 此の夜 酔うて啼くも 君厭ふ勿れ

(七律。兼・炎・添・厭 (下平声塩韻))

物語中でも最も短い篇である。卷名は第四句に詠込まれている。落胤と名告り出たので内大臣が引取った近江の君は、前の巻でみたように貴人としての教養や振舞いに欠け、滑稽で、世間でも噂の存在になっていたから、内大臣も持て余していた。光源氏によれば、それも内大臣の配慮不足のせいなのだという。近江の君との対比から、同じ内大臣の娘玉鬢は、光源氏の行届いた心配りが知られるわけだが、その二人の間は次第に「なつかしううちとけきこえたまふ」(③256頁4〜5行)ものとなった。秋の涼風吹く頃、光源氏は西の対の玉鬢を訪れ、琴を教えたり、夜の風情を共に楽しむ。庭先の篝火に目をやって焚かせると、美しい玉鬢の姿が浮かびあがる。「篝火にたちそふ恋の煙……」と彼が詠みかけると、「行く方なき空に消ちてよ……」とやんわりかわす彼女であった。光源氏が部屋を出ようとすると

と、東の対から聞こえ来る楽の音色、それは夕霧や柏木・弁少将らのものである。早速光源氏は彼らを呼び寄せるが、彼女は思いがけず兄弟(柏木・弁少将)の演奏を聴くことになった、というのが本巻の展開である。詩句を聯毎に訳すと次のようになる。

内大臣様の姫君でいらつしやるこの玉鬢と近江の君様は、賢さと愚かさという点で異っておられまして、重なるなどということはありません

秋の涼やかな風のひびきに(秋の到来を知り) 哀しい物思いをするようになる時節ですが、(光源氏様の玉鬢様に寄せる思いは) 篝火の炎のようにもえさかり、(彼女へのくすぶる思いは) もやもやと心にたちこめて消えることもございません。

(秋の) 水の音に誘われ心も冷えびえとした気持ちになりますもの、(篝火の明かりに浮かんだ) 美しい玉鬢様の御髪を見られましては、(光源氏様も彼女への) 思いを一層募らせるのでございました。

笙や笛を吹きならし、のどかに楽しめる方々でございませうが、こんな夜に(思いあまつて) 飲み過ぎ、つい泣いて

しまうようなことがあつても、お笑いなさらないで下さいませ。

首聯は、近江の君と玉鬘の二人の内大臣の娘が賢愚対照的存在であることを言う。本書冒頭の「このごろ世の人の言ぐさに、内の大殿の今姫君と、事にふれつつ言ひ散ら」(③255頁1〜2行) されている前者とは違つて、玉鬘は六条院に迎えられたことを「いとど深き御心のみまさりたまへば、やうやうなつかしううちとけきこえたまふ」(③256頁3〜5行) 程幸せであるということを背景にしている。「君見遵將<sub>レ</sub>疎、功名<sub>同</sub>輩<sub>同</sub>俱」(藤原敦光「初冬述懷百韻」『続文粹』卷二) は「<sub>同</sub>輩」(二人) の一例。「賢愚」も「賢愚共在浮生内、貴賤同趨群動間」(題二謝公東山障子二「白氏文集」卷六七) 他、白詩によく見える語彙である。

領聯の背景は「秋になりぬ。初風涼しく吹き出でて、背子が衣もうらさびしき心地したまふ」(③256頁6〜7行) と光源氏が玉鬘の西の対に渡る条から、明るく篝火を焚かせて「篝火にたちそふ恋の煙こそ世には絶えせぬほのほなりけれ」(③257頁10〜12行) の歌を詠み、帰りかけるあたりまでであろう。「病多知二夜永一、年長覺<sub>二</sub>秋悲<sub>一</sub>」(代書詩「百韻」『白氏文集』

卷二三)「涼風為<sub>レ</sub>誰催<sub>二</sub>蕭瑟<sub>一</sub>、料識秋悲豈到<sub>レ</sub>情」(藤原周光「秋三首」其二「本朝無題詩」卷五) は「秋悲」の例。所謂悲秋観は、「楚辭」「九弁」に発し、潘岳「秋興賦」等に受継がれ、本朝では平安初期の嵯峨天皇の頃に定着してゆくこととなった(小島憲之「古今集以前」塙書房、一九七六年)。また、「老住<sub>二</sub>香山<sub>一</sub>初到夜、秋逢<sub>二</sub>白月正円時<sub>一</sub>」(初入<sub>二</sub>香山院<sub>一</sub>対<sub>レ</sub>月「白氏文集」卷六六「新撰朗詠集」卷上・月31) は「初到」の一例。白詩では他の例でも主語になるのは人であったが、本朝では必ずしもそうではなく、「嚴冬初到<sub>二</sub>尽<sub>二</sub>群草<sub>一</sub>、老菊尚殘抽<sub>二</sub>衆芳<sub>一</sub>」(大江匡房「賦<sub>二</sub>殘菊<sub>一</sub>」『本朝無題詩』卷二・62) のような先行例もある。「金風」は秋風。「金風(張協詩曰、金風扇<sub>二</sub>素節<sub>一</sub>、丹露啓<sub>二</sub>陰期<sub>一</sub>)」(「初学記」卷三・秋) とあるが、ここは後の条に「風の音秋になりけりと聞こえつる笛の音に忍ばれでなむ」(③258頁12〜13行) とあるように、楽の音も意識して綴られているかも知れない。イメージの拡がりも意識して、「楼上金風声漸緊、月中銀字韻初調」(「秋夜聽<sub>二</sub>高調涼州<sub>一</sub>」『白氏文集』卷六四)「翅<sub>二</sub>弘<sub>二</sub>金風<sub>一</sub>音和<sub>レ</sub>楽、心驚<sub>二</sub>殘月<sub>一</sub>一陣重<sub>レ</sub>行」(大江千古「寒雁識<sub>二</sub>秋天<sub>一</sub>」『類聚句題抄』239) のような例も挙げておこうか。「煙鬢」は「一堂費<sub>二</sub>百萬<sub>一</sub>、鬢々



青煙起」(「傷宅」『白氏文集』卷二)のような表現に出るものであろうか。煙雲が盛んに高く立つ様を表現し、光源氏の歌意を込める。「篝火」はかがり火。陳勝が乱を起こした時、呉広に(狐鳴をさせ)焚かせたのも篝火(『史記』陳涉世家)で、其れは人心を惑わせる為であったが、まさか炎の中に浮かびあがる玉鬢の姿に心惑わせる光源氏に重ねているわけでもあるまい。

頸聯の背景は恐らく篝火が「いと涼しげなる遣水のほとりに、けしきことに広がり伏したる檀まゆみの木の下に打松おどろおどろしからぬほどに置きて」(③257頁1〜2行)焚かれている場面であろう。「御前の方は、いと涼しくをかしきほどなる光に、女の御さま見るにかひあり。御髪の手当たりなど、いと冷やかにあてはかなる心地」(③257頁3〜5行)だと玉鬢の様子を語り、「絶えず人さぶらひ点しつけよ。……庭の光なき、いとものむつかしく、おほつかなしや」(③257頁7〜9行)と篝火を絶やさぬように光源氏は命じている。「水声」は水音。「松閣晴看山色近、石渠秋放水声新」(「宿裴相公興化池亭」『白氏文集』卷五六)「行道遺蹤苔色旧、坐禅昔意水声秋」(藤原有国「秋日登天台」過二故康上人旧房二『本朝麗藻』卷下)などと

ある。「心更冷」とは場面からすると一層ひややかな秋の気分になるということか。「従二初到一任心情冷、被レ勤二春風一適破顔」(「春日尋レ山」『菅家文章』卷三)のように興が乗らないさまの様に使われることもあるが、ここでは多分そうではあるまい。「雲鬢」は美しい豊かな髪で、「靈姿理二雲鬢一、仙駕度二潢流一」(山田三方「七夕」『懷風藻』)と織女が詠まれ、「雲鬢花顔金步搖、芙蓉帳暖度」春宵「……雲鬢半垂新睡覺、花冠不レ整下レ堂來」(「長恨歌」『白氏文集』卷一二)と楊貴妃が詠まれること等も参照されようか。

尾聯は光源氏と玉鬢の歌を交わした後の場面、即ち東の対に夕霧や柏木・弁少将が訪れていたことを樂の音で知った光源氏が、彼らを呼び寄せ奏樂を樂しむところを背景としている。「東の対の方に、おもしろき笛の音、箏に吹きあはせたり。……三人参りたまへり。……御琴ひき出でて、……源中将は、盤涉調にいとおもしろく吹き、……弁少将拍子うち出でて、忍びやかにうたふ声、鈴虫にまがひたり」(③258頁5行〜259頁2行)とある。詩句に見える「笙」はそこに見えないが、笛の仲間とみて並べ立てて表現している。「閑遊客」とは、この座でのんびりと奏樂し樂しんでいる光源氏達を指す。そして、末句

は「御簾の内に、物の音聞き分く人もしたまふらんかし。今宵は盃など心してを。盛り過ぎたる人は、酔泣きのついでに、忍ばぬこともこそ」(③29頁4〜6行)という光源氏の言葉をふまえて表現されている。「愁殺閑遊客、聞レ歌不レ見レ人」(種レ柳三詠)其三『白氏文集』卷六五「和風引レ步入二禅林一、一日閑遊足レ動レ心」(惟宗孝言「春日遊二長樂寺一」『本朝無題詩』卷八・520)は「閑遊」の例。「亦莫レ恋二此身一、亦莫レ厭二此身一」(逍遙詠)『白氏文集』卷一一「此郷多二宝玉一、慎勿レ厭二清貧一」(岑參「送三張子尉二南海一」)は「勿厭」(さらわないでください)の類例である。

二十八 野分(同六)

掖庭宮砌涼秋望 掖庭の宮の砌 涼秋の望  
宿露瑩珠感万端 宿露珠を瑩かせて感ひ万端なり  
百草千花籬殖夕 百草 千花 籬に殖えらるる夕  
墻傾瓦乱野分寒 墻傾き 瓦乱れて 野分寒し  
事親頻励晨昏思 親に事へて頻りに励ます 晨昏の思ひ  
孝子争厭風雨難 孝子争てか厭はん 風雨の難  
春曙霞間桜一片 春の曙 霞の間に 桜一片

美人知否任心看 美人 知るや否や 心に任せて看る  
(七律。端・寒・難・看(上平声寒韻))

卷の名は第四句に詠込まれている。この巻の中心となるのは光源氏の息子夕霧(母は葵の上)である。先ず激しい野分に襲われた、六条院の趣向豊かな秋好中宮の庭や紫の上の庭が描写される。日暮れ過ぎ見舞に参上した夕霧は妻戸の隙間から紫の上を垣間見て、その美しさに心奪われる。彼は祖母(大宮)のいる三条宮に一旦戻るが、忘れえず彼女のような妻を迎えたいと思いつけるのである。夜明け前に再び六条院を見舞い、父と紫の上の仲睦まじい語り合いを好ましく思う。彼が父の命を受け、秋好中宮を訪れ復命すると、今度は連立つて秋好中宮・明石の君・玉鬘・花散里へと見舞いに巡回する。夕霧は興味津々で、就中親子と思っている玉鬘に父が戯れかけ抱きかかえるようにしたのに驚愕、生真面目な彼らしい。その後、夕霧は明石の姫君を見舞いに訪れるが、紫の上のもとへ行っていて不在だったので和歌を届ける。そして、彼女が戻ってくるや、その美しさを紫の上や玉鬘に比べたりするのであった。詩句を聯毎に訳出すると次のようになろうか。

(秋好) 中宮様の御殿の涼やかな秋の眺めは(まことに素

晴らしいもので、夜来の露が珠玉のように光輝いて様々  
な思いにかられることでございます。

様々の草花が籬まがきの下にございました夕方、その頃より風  
がことにひどくなり、垣根が傾いたり、瓦が飛散したりし  
て、台風が寒々と吹きつけるようになったのでございまし  
た。

(夕霧様は)親(光源氏様)にお仕えして、頻りに(三条  
院や六条院を訪れて、台風後の)人々をお励ましになり、  
朝な夕なに心をくわいておいでです。(彼のような)親孝  
行な方が一体どうして、風雨の難儀を厭うたり致しましよ  
うか。

(ところで、夕霧様は南の殿にお伺いした折、紫の上様を  
垣間見され)春の曙の霞の間から見事な権桜をちらり心の  
ままに見つめ(た思ひになつ)たのですが、(はてさて)  
そのお美しい紫の上様は御存知であつたでしょうかどうで  
しょうか。

首聯は巻の冒頭の六条院の秋好中宮の庭のたたずまいを描写  
した、

中宮の御前に、秋の花を植ゑさせたまへること、常の年よ

り見どころ多く、色種を尽くして、よしある黒木、赤木の  
籬まがきを結びまぜつつ、同じき花の枝ざし、姿、朝夕露の光も  
常ならず、玉とかかやきて、造りわたせる野辺の色を見る  
に……涼しうおもしろく、心あくがるるやうなり。

(③263頁1〜7行)

あたりを念頭に詠んだものであろう。「掖庭」は後宮を指し、  
皇妃や宮女の居処のこと。ここではそれを光源氏六条院に転用  
し、冒頭の秋好中宮の西南の御殿を指し言っている。「後宮則  
有、掖庭椒房后妃之室……」(班固「西都賦」『文選』卷一)と  
ある李善注に「応劭曰、掖庭、宮人之宮。漢官儀曰、婕妤以下  
皆居「掖庭」、呂向注には「掖庭、宮名。在「天子左右」、  
如「肘腋」と見える。『文選』にはよく見える語で、本朝でも  
「朔平門衛不「敢入」、別有「殊恩」拜「掖庭」(小野岑守  
「奉」拜「掖庭」簡「橘尚書」『文華秀麗集』卷上)と詠まれる。  
「宮砌」は宮殿の石の階段、もしくは石畳み。「宿露」は夜来の  
露の意で、「宿露凝「金掌」、晨暉上「壁璫」(「渭村退居……」  
『白氏文集』卷一五)「競「宿露」以講「一乘之文」、属「落日」  
以繫「九品之望」(高階積善「暮秋勸学会同賦」世尊大恩」  
『本朝文粹』卷一〇・279)などの例がある。「瑩珠」はかがやく

珠。「詞露瑩、珠先点レ草、筆鋒淬劍本蔵レ松」(大江朝綱「裴大  
使重押ニ蹤字一見賜ニ瓊章……」『扶桑集』卷七)とある。こ  
こでは露を見立てた表現。「露篔簹、迎レ夜滑、風襟蕭灑先レ秋  
涼」(池上夜境)『白氏文集』卷五二「千載佳句」卷上・晩夏  
四『和漢朗詠集』卷上・納涼160)はよく知られた例で、「さ牡  
鹿の朝たつ小野の秋萩に珠と見るまで、置ける白露」(『万葉集』  
一五九八『和漢朗詠集』卷上・露340、大伴家持)「白露の風の  
吹きしく秋の野は貫ぬきとめぬ玉ぞ散りける」(『後撰集』308文  
室朝康)などは和歌の代表的な作例であると言つて良い。「万  
端」は「心緒万端、書両紙、欲レ封重読意遅々」(禁中夜作レ書  
与三元九)『白氏文集』卷一四)「繫レ書旅雁望孤点、織レ草暗  
虫思万端」(藤原季綱「秋日偶吟」『本朝無題詩』卷五・282)な  
どと見えるように、さまざまに思いが起る様。

頌聯の第三句は首聯の背景の「色種を尽くして」植えた花園  
が、「野分例の年よりもおどろおどろしく、空の色変りて吹き  
出づ。……暮れゆくままに、物も見えず吹き迷はして、いとむ  
くつけ」(③264頁1〜6行)き有様であったことに始まり、紫  
の上の南殿でも「もとあらの小萩はしたなく待ちえたる風のけ  
しきなり。折れ返り、露もとまるまじく吹き散らす」(③264頁

9〜11行)と見えるのによる。第四句は、夕霧が三条殿に参上  
すると、待ちかねていた大宮が「大きな木の枝などの折るる  
音もいとうたてであり、殿の瓦さへ、残るまじく吹き散らすに、  
かくてもものしたまへること」(③268頁11〜13行)と述べている  
こともあるが、恐らくは、風が少しおさまった明け方に、「二六  
条院には、離れたる屋ども倒れたり」(③270頁2〜3行)と聞  
いた夕霧が再び訪れた条に見える紫の上の南殿の景、即ち「山  
の木ども吹きなびかして、枝ども多く折れ伏したり。草むら  
はさらにも言はず、檜皮、瓦、所どころの立節、透垣などやう  
のもの乱りがはし」(③270頁15行〜271頁2行)という有様を反  
映しているとみても良いだろう。「百草千花」という有様を反  
白詩の「千花百草凋零後、留向二粉々雪裡一看」(題二李次雲  
窓竹)『白氏文集』卷一三『千載佳句』卷下・竹630『新撰朗  
詠集』卷下・竹403)あたりに学んだ表現であろうか。

頌聯は、夕霧が台風の見舞いに六条院の紫の上の殿舎を訪れ、  
父の命で三条院に赴き大宮を慰めたり、秋好中宮を見舞つたり  
した上、更には父と一緒に明石の君、玉鬘、花散里を訪ねると  
いう展開になっていることをふまえての表現とみられる。「事  
親」は親に仕えること。「夫孝始ニ於事一レ親、中ニ於事一レ君、

終「於立レ身」(『孝經』開宗明義章)と見えるのはよく知られている。「晨昏」は朝と夕方で、「昏定而晨省」(『礼記』典礼上)というように、朝な夕なに父母の安否を気遣い尋ねることを暗示し、孝養を尽くす意をこめ、「晨昏問レ起居」、恭順発「心誠」(『蜀路石婦』)『白氏文集』卷二)と詠まれてもいる。

尾聯は物語の初めに戻り、夕霧が六条院を訪れて、紫の上の南殿にて彼女を垣間見する場面、即ち、

東の渡殿の小障子のより、妻戸の開きたる隙を伺、心もな  
く見入れたまへるに、女房のあまた見ゆれば、立ちとまり  
て音もせで見。御屏風も、風のいたく吹きければ、押し  
たたみ寄せたるに、見通しあらはなる廂の御座におましみたまへ  
る人、ものに紛るべくもあらず、気高きよらに、さにと  
ほふ心地して、春の曙の霞の間より、おもしろき樺桜の咲  
き乱れたるを見る心地す。

(③264頁13～265頁4行)

の条をふまえ詠まれている。「一片」はここでは桜の花びらを

指す。「樹頭樹底覓レ残紅」、「一片西飛」、「片東」(王建「宮詞」)と散りまがう多くの花を賦す作に用いられている。「任心」は心のままに。任意に同じ。「錢塘去レ国三千里、一道風光任レ意看」(章孝標「及第」)「千載佳句」卷上・及第39「和漢朗詠集」卷下・慶賀766)「唯須三偷レ眼見」、「不レ許二任レ心攀」(「殘菊」『菅家文章』卷二)などの例がある。

(注) 爛柯の故事については、鈴木弘道「浜松中納言物語と爛柯の故事」(『平安末期物語についての研究』赤尾照文堂、一九七一年)、上原作和「爛柯」の物語史「斧の柄朽つ」る物語の主題生成」(『光源氏物語学芸史——右書左琴の思想——』翰林書房、二〇〇六年)、田中幹子「王質爛柯」と「劉阮天台」——中世漢故事変容の諸相——(『和漢・新撰朗詠集の素材研究』和泉書院、二〇〇八年)などの論がある。

(付記) 本稿の(六)は『北陸古典研究』29号(二〇一四年十一月)に取載している。